彙　報

平成九年度春期東洋学講座講演要旨

（東西の地図に見えるアジア）

第四三七回　五月二〇日（火）

漢民族の華夷思想と地図

東洋文庫研究員
大阪大学名誉教授　海　野　一　隆

周知のようにアジアという地域概念は西方起源のものなので、西洋文明と接触する以前の漢民族社会に、アジアを単位とする地図があろうはずはない。従って、西洋で言うアジアに該当する範囲を、古来漢民族がどのように地図上に表現してきたかを探ることにしてみたい。

そもそも、新石器時代黄河中流域に独自の文化圏を構築した漢民族は、文化程度の低いその周辺の住民に対する優越感から、自分たちの居住する空間を中華、周辺の人々を蛮夷としてとらえた。蛮夷の地は方角によって東・西・南・北の「海」とも称されるが、この場合の「海」が現実の海域でないことは、『荀子』（紀元前三世紀）王制篇の四海についての記事（例えば北海は良馬、西海は皮革の産地）によっても明らかである。中華の言語・風習が周辺地域にひろまると、かつての四海は中華の一部となり、四海はさらに外方へと押しやられる。このように、中華および四海は共に極めて柔軟性に富む空間概念であり、それぞれの範囲は時代によって異なる。中華の東方への拡大が海岸にまで達し、玉門関・陽関が中華の西の玄関となった時代においても、蛮夷の地が中華内部に点々と島状に取残されていたことは、宋、鄭樵『通志』（一二世紀）や『宋史』蛮夷伝の記載から明らかとなる。それらの蛮夷は、要するに今日言うところの少数民族にほかならないのであり、華夷混合国家という点では、昔も今も同じということになろう。ところで、中華という空間を要領よく簡潔に述べる唐の杜佑の言葉があるので引用しておこう。

覆載ノ内、日月ノ臨ム所、華夏ハ土ノ中ニ居ル。生物ハ気ノ正ヲ受ケ、其ノ人ハ性和ニシテ才恵マル。其ノ地ハ産厚クシテ類繁シ。聖賢ヲ誕生セシムル所以ナリ。

（『通典』巻一八五辺防）

描出範囲を中華王朝の版図に限定せず、広く周辺の蛮夷の地をも包含する地図は、古来華夷図と称されており、記録に見える最初の作品は、唐の賈耽の『海内華夷図』（八

〇一年）である。それは亡佚して伝わらないが、その流れを汲むのが宋の税安礼『歴代地理指掌図』所載古今華夷区域揔要図（一一〇〇年頃）および阜昌七年（一一三六）刻石の『華夷図』であり、東は朝鮮・東海、西は葱嶺・于闐、南は南海、北は長城を含む範囲を内容としている。従って、図形としては国土全図のそれと大差はなく、賈耽の図においても、「数百余国」に及んだという「四方蕃夷之地」は、単に図の周辺部分にその名称が列挙されていたに過ぎないと考えられる。要するに、華夷図とは言うものの、華と夷が対等に扱われていたのではなく、蛮夷の地は巨大な中華の周辺に言わば添景として文字だけがちりばめられるという状況であった。

漢民族の知る地上世界の地図化において、このような伝統的手法は常に生かされていて、中華以外の空間は距離・方角を無視されるのが普通であった。南宋、程大昌『禹貢論山川地理図』所載九州山川実証揔図（一一八一年刊）は、大陸西側に海洋を登場させているが、西域諸国の占める空間は極めて狭く、陸地の大部分は「九州」の境域となっている。

元の朱思本の『輿地図』を分割して地図帳形式に改めた明の羅洪先の『広輿図』の嘉靖四十年（一五六一）版において、羅洪先の需めに応じて胡松が加えた「四夷図」は、初版（一五五七年頃）以来の「輿地総図」（国土全図）を、明の桂萼の『皇明輿図』所収四夷方位之図に基づいて改訂したものに過ぎず、描出の範囲は全く同じである。

西洋の世界図に接することとなった明代末期以降においても、伝統的な華夷図的表現は存続している。マテオ・リッチ（利瑪竇）が一五九五年から三年間南昌に滞在していた折、彼と交際した同地の学者章潢は、その著『図書編』（一六一三年刊）にリッチの世界図を紹介する一方、対抗意識から「四海華夷総図」なるものを掲げているが、彼自身言うようにそれは仏教の南瞻部洲図である。図の大部分を中華の地が占める華夷図では西洋の世界図に対抗させ得ないと考えた結果にほかならない。西洋の世界図は西洋人の足跡の及んだ範囲を描いたものに過ぎず、彼らの知らない土地のあることを示そうとしたのであったが、インドを主要部とする大陸の西端は半島としての弗懍（プルム、ローマ）であり、実質的にはアジア大陸の図となっている。

仏教における現実大陸たる瞻部洲の図を利用して「華夷総図」とした章潢の場合は、特別な例であり、明末清初において作られた漢民族社会での世界図は、翻訳図を別にすると、国土の周辺部に西洋系地理知識を採用するという華夷図方式のものであった。万暦三十三年（一六〇五）の同四十五年（一六一七）に刊行された梁輔の『乾坤万国全図

古今人物事跡』は、図の左端（西端）を大葱嶺・崑崙山とし、残る三方の海域に、主として南北アメリカの国名を島嶼として配置している。その刊記に「万暦癸巳」（二十一年、一五九三）とあるが、万暦三十年（一六〇二）刊のリッチの『坤輿万国全図』の記事が引用されているので、それ以後の「乙巳」（一六〇五）か「丁巳」（一六一七）の誤りであることは明らかである。

西洋製世界図における図形を採用する華夷図方式の図としては、明の曹君義『天下九辺分野人跡路程全図』（一六四四年刊）が初期のものである。国土の西方にアフリカ・地中海・ヨーロッパを縮小して加え、南・北アメリカを分離して、アジア大陸の東南方および東北方にそれぞれ島として描いている。採用されている西洋系地名は、艾儒略（ジューリオ・アレーニ）『職方外紀』五巻本（一六二三年頃刊）所載図のそれである。

右に挙げた両図すなわち梁輔の図と曹君義の図とを資料として作られたものに、清代乾隆年間刊行の無題・無刊記の図があり、図形は梁輔の図のそれを踏襲しながらも、大陸西方に海洋を置いている。曹君義の図からは、記事（各省辺鎮外国路程）を転載しているが、図形については全く利用するところがない。西洋系地名もほとんど梁輔図そのままであり、曹君義図によるものは、わずかに図の右上の飛斯得島（イスランディア、アイスランド）と言った程度である。図中に「乾隆八年（一七四三）添設分府」云々という記載があるので、刊行は当然それ以降である。

第四三八回　五月二七日（火）

江戸時代のアジア地図

東海大学教授　石　山　洋

近世日本人がアジアを認識するときは、即世界を知ることであった一面と、迫り来る外圧の恐れの面と両面があったのではなかろうか。

古代日本は、最初は中国世界の中で位置付けられた。聖徳太子が現われ、仏教に学び、中国に隷属しないインドの存在に刺戟されて三国世界観を成立させ、さらに仏教的世界像を拡げ、『五天竺図』（法隆寺、一三六四）にインド西方を覗う人も生じた。しかし西洋を知るのは一六世紀中頃である。